

# セルフモニタリング傾向の意味の再検討

— 対人不安、自己評価との関係から —

杉 浦 健

## 問 題

私たちは状況に応じて様々に行動を使い分ける。例えば、友人とうまくやっていくために楽しくなくても楽しそうに振る舞ったり、公式の場などで回りの人の行動をうかがって場違いな行動を取らないようにする。それはある程度、社会的にうまくやっていくために必要なことであり、社会的スキルと言えるものである。しかしながら状況に応じて自分自身や自分の行動を使い分けるのが著しい場合には、私たちはまた自分の自由が無いと感じたり、自分が自分でないと感じたりするようになる。

これまでの研究は、このような状況に応じた行動の使い分けに大きな個人差があることを明らかにしてきた。本研究で問題にするセルフモニタリング (self-monitoring) もそのような個人差に焦点をあてた概念といえる<sup>1</sup>。Snyder (1974) は、「人が自己呈示や表出行動、非言語的感情表出を調整する程度には驚くべき、かつ重要な個人差がある」と述べ、そのような傾向をセルフモニタリングという概念によって表わし、その個人差を測定する尺度を作成した。

ところがこの尺度は後の研究においてしばしば批判の対象になってきた。Snyder (1974) はセルフモニタリング尺度の得点によって高セルフモニタリング者と低セルフモニタリング者とに分けて両者の行動を比較しており、暗黙の内にセルフモニタリング尺度の1次元性を仮定している。

しかしその後の研究はセルフモニタリング尺度が多次元の概念によって構成されていることを明らかにしてきている。例えば Briggs, Cheek, & Buss (1980) は、因子分析の結果、「外向性」「他者指向性」「演技性」の3因子を抽出している。Gabrenya & Arkin (1980) は、「演技性」「社交性—社会的不安」「他者指向性」「スピーキング能力」の4因子を抽出した。また日本の研究でも岩淵・田中・中里 (1982) が Briggs, et al. (1980) と同様の3因子を見出している。Snyder (1974) 自身も、セルフモニタリング尺度を作成するにあたって複

数の構成要素<sup>2</sup>を仮定しており、またセルフモニタリングの定義が「自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切かを社会的比較を手がかりにしてモニターし、それらをコントロールする個人差」であること自体、セルフモニタリングには行動をモニターする側面と行動をコントロールする側面の2つの次元が考えられ、セルフモニタリング尺度が多次元であるという上述した諸研究の結果は当然のことだと思われる。

ところで Lennox & Wolf (1984) はこのようなセルフモニタリング尺度の構成上の問題についてふれ、Snyder (1974) の仮定したセルフモニタリング傾向の5つの構成要素のうち4つまでが社会的不安と正の相関をするのは、効果的な社会的相互作用を表わしているはずのセルフモニタリングの概念と矛盾していることを指摘した。そして効果的な社会的相互作用を可能にするセルフモニタリング能力を測定する改訂セルフモニタリング尺度を作成し、さらに社会的不安と関係する要素についても、「適切さへの関心 (concern for appropriateness)」として新たに尺度を構成した。

セルフモニタリング傾向を単なる能力の高低と考える事に対しては、傾向の違いによって行動を予測するという点では問題が多いことが指摘されているが (Snyder, 1987 ; 辻, 1988)、Lennox & Wolfe (1984) がセルフモニタリングを能力的側面と適切さへの関心との2つの側面に分離したのは慧眼であったと思われる。これに関連し堀毛 (1986) は、セルフモニタリングには能力的側面である「自己呈示を管理出来るとする認識」と、適切さへの関心の側面である「他者への関心、依存」という2つの独立した側面があり、それらの変数の組み合わせによってセルフモニタリング傾向の相違をより具体的に捕らえうる可能性があることを示唆した。しかしながら、これまでのセルフモニタリングの研究においては、そのような能力的側面と他者への関心的側面の相互作用を問題にした研究は見られなかった。

本研究の目的は、このようなセルフモニタリングの二側面の相互作用を実証し、セルフモニタリング傾向の持つ意味について明らかにすることである。そのため、まず Snyder (1974) のセルフモニタリング尺度と Lennox & Wolfe (1984) の改訂モニタリング尺度及び適切さへの関心尺度、及びセルフモニタリングと関係が高いと考えられる自意識尺度 (菅原, 1984) との関係調べることによって、セルフモニタリング尺度が前述のような2つの要素を有していることを確認する。そしてそれらの2側面の相互作用が効果的な社会的相互作用にいかなる影響を与えているのかを対人不安及び自己評価との関係を見ることによって明らかにしていく。

## 仮説

自己呈示のコントロール能力が高く、他者への関心も高い者は、Snyder (1974) の言う高セルフモニタリング者に該当し、効果的な社会的相互作用ができるために自己評価が高く（効果的な自己呈示は自己評価を維持する）、対人不安も低いと考えられるが、他者への関心は高いものの自己呈示のコントロール能力が低い者は、社会的にうまくやっていくためには人の目を気にして自分をコントロールしなくてはならないと思っているのに、そのための能力が無く社会的にうまくやっていないとってしまうため、対人不安が高く、また自己評価も低いと考えられる。また自己呈示のコントロール能力が低くとも、他者への関心も低い者は、Snyder (1974) の低セルフモニタリング者に該当し、他者の目にわずらわされることなくマイペースで社会生活がおくれるために、対人不安も自己評価も適度なレベルに保たれると考えられる。

## 方法

### 被験者

教職課程履修の大学生243名（男子137名、女子106名）。

### 調査内容

1. 日本語版セルフモニタリング尺度25項目（以下、SM 尺度）。Snyder (1974) の原版をもとに岩淵・田中・中里 (1982) が訳出したもの。外向性、他者志向性、演技性の3因子が抽出されている。
2. 改訂セルフモニタリング尺度13項目（以下、改訂 SM 尺度）。Lennox & Wolfe (1984) を石原・水野 (1992) が訳出したもの。セルフモニタリング傾向を各個人が持つ能力と仮定している。他者への表出行動への感受性と自己提示の修正能力の2因子が抽出されている。ただし項目「様々な人や状況に合わせて行動を変えるのに苦労する」は SM 尺度と共通するため、本研究で実際に行ったのは12項目であり、1項目は SM 尺度の上記項目の評定得点をあてた。
3. 適切さへの関心尺度20項目（Lennox & Wolfe, 1984 を翻訳し使用した）。状況による（行動の）変容性（cross-situational variability）と社会的比較情報への注意（attention to social comparison information）の2因子からなっている。

4. 自意識尺度21項目 (菅原、1984)。公的自意識と私的自意識の2因子からなる。
5. 対人不安尺度7項目 (押見、1992)。
6. 自己評価尺度10項目 (山本・松井・山成、1982)

評定はすべて「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の五段階で行った。

#### 手続き

調査は心理学の授業中に行なった。調査用紙はA4版で、表紙に年齢、性別を記入してもらった。調査用紙は調査内容1から6の順番及び尺度内の項目をランダムイズして3バージョンを作成した。実施時期は1996年6月、所要時間は約20分であった。

### 結果と考察

それぞれ独自のセルフモニタリングの理論に基づいたSM尺度、改訂SM尺度、適切さへの関心尺度について、それぞれの表わしている要素を明らかにするため、主因子法、プロマックス回転によって因子分析を行った。なお以降の統計解析は京都大学大型計算機センターのSAS (Statistical Analysis System) によって行った。

#### SM尺度の因子分析

因子分析の結果、固有値1以上の因子が7つ抽出されたが、第3因子以降は固有値が急減し(第1因子=4.44、第2因子=3.14、第3因子=1.55、第4因子=1.43)、因子の解釈も難しかったため、2因子を指定して再度因子分析を行った (Table 1)。因子負荷量.35未満の項目を削除し、残った項目によって因子命名を行った<sup>3</sup>。第1因子は「グループの中でめったに注目的にならない」や「人前では決まりが悪くて思うように自分を出せない」、「パーティでは冗談を言ったり話したりするのは他の人に任せて自分は黙っている方だ」(以上すべて逆転項目)など、岩淵他(1982)において「外向性」と命名された項目と「たぶん良い役者になれるだろうと思う」や「自分はエンターティナーであると思ったことがある」など、岩淵他(1982)が「演技性」と名付けた項目に負荷が高かった。辻(1988)の研究では、本研究の結果と同様に岩淵他(1982)の外向性因子と演技性因子の項目を中心として第1因子が形成されており、「演技性因子」と命名している。この因子は本研究の仮説における自己提示のコントロール能力を表すものと考えられ、ここでは「演技能力」と命名した。 $\alpha$ 係数は0.78であった。

Table 1 セルフモニタリング尺度因子分析結果

	I	II	共通性
<b>第1因子 演技能力</b>			
パーティーでは、冗談を言ったり、話したりするのは、他の人に任せて、自分は黙っている方だ	0.72	-0.04	0.52
グループの中で、めったに注目的にならない	0.60	0.01	0.36
人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない	0.56	0.26	0.38
他の人に、自分に好意をもたせるのが、特別上手な方ではない	0.50	-0.21	0.29
これまでにジェスチャーや即興の芝居のようなゲームで、うまくできたためしがない	0.49	0.01	0.24
たぶん良い役者になれるだろうと思う	-0.47	0.29	0.30
あまり詳しく知らないトピックスでも、即興のスピーチができる	-0.48	0.07	0.24
自分はエンターティナーであると思ったことがある	-0.54	0.17	0.32
<b>第2因子 他者志向性</b>			
本当は楽しくなくても、楽しそうに振るまうことが良くある	0.06	0.63	0.40
状況や相手が異なれば、自分も違うように振るまうことが良くある	0.05	0.59	0.35
実際以上に感動しているかのように振るまうことがある	-0.13	0.57	0.34
仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ	-0.13	0.53	0.30
自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある	0.40	0.50	0.41
本当は嫌いな相手でも表面的にはうまく付き合っている	-0.12	0.41	0.18
いろんな場面でどう振るまっていればいいかわからないとき他の人の行動を見てヒントにする	0.20	0.38	0.19
いろいろな人や状況にあわせて、自分の行動を変えていくのは苦手だ	0.32	-0.43	0.28
人を喜ばせたり、人に気に入ってもらおうとして、自分の意見や振るまい方を変えたりしない	-0.04	-0.57	0.33
	固有値	3.14	
	4.44		
	寄与率	0.12	0.30
	0.18		
<b>削除項目</b>			
パーティーや集まりで、他の人が気に入るようなことを、言ったりしたりしようとはしない	0.33	-0.20	0.15
確信を持っていることしか主張できない	0.28	0.05	0.08
自分の気持ちや、考え・信じていることを、行動にそのままあらず	-0.31	-0.30	0.19
私は、常に見かけのままの人間というわけではない	0.03	0.22	0.05
喜劇を見ているとき、一人よりみんなと一緒にの方が良く笑う	0.03	0.17	0.03
映画や本・音楽を選ぶとき、友人のアドバイスをめったに必要としない	0.04	-0.10	0.01
よかれと思えば、相手の目を見て、まじめな顔をしながら、うそをつくことができる	-0.14	0.33	0.13
人の行動をまねるのは苦手だ	0.16	-0.34	0.14

第2因子は「本当は楽しくなくても楽しそうにふるまうことがある」や「仲良くやっていたり、好かれたりするために他の人が自分の望んでいることをする方だ」、また「人を喜ばせ

Table 2 改訂セルフモニタリング尺度因子分析結果

	I	II	共通性
<b>第1因子 他者の表出行動への感受性</b>			
他の誰かが私に嘘をついていれば、普通その人の表現の仕方からすぐにそれが分かる	0.72	0.09	0.53
よく、人の目を見てその本当の気持ちを読みとることができる	0.72	0.24	0.57
普通、相手の目を読みとって自分が何か不適切なことを言ってしまったかが分かる	0.60	0.02	0.36
私の直感力は、人の感情や動機を理解するときには、十分によい働きをする	0.59	0.25	0.40
会話をしているとき、一緒にいる人のごく微妙な表情の変化にも敏感である	0.53	0.11	0.29
他の人が、あるジョークを聞いて、うわべはなるほどと思って笑っているようでも、心の中では、趣味の悪いジョークだと考えているときには、たいていそれが分かる	0.44	0.00	0.20
<b>第2因子 自己呈示の修正能力</b>			
社会的な場面で、他の人が望むように自分の行動を変えることができる	-0.02	0.66	0.44
周囲がそのように要求していると分かれば、それに応じて行動を調節するのは簡単である	0.12	0.56	0.33
自分のおかれているどんな状況にも適した行動を取ることができる	0.19	0.46	0.25
他の人にこう印象づけたいと思うつき合い方をコントロールすることができる	0.31	0.41	0.26
自分の描くイメージが相手に伝わっていないと感じるとき、それを役立つようなイメージにたやすく変えることができる	0.29	0.36	0.21
たとえそうすれば自分にとって有利になる場合でも、相手によい態度を装うことができない	-0.02	-0.38	0.15
様々な人や状況にあわせて行動を変えるのに苦労する	-0.03	0.40	0.16
固有値	3.63	1.82	
寄与率	0.28	0.14	0.42

たり、気に入ってもらおうとして自分の意見や振るまい方を変えたりしない（逆転項目）」など、行動の適切さを考え、自分の気持ちを抑えることを表わす因子と考えられ、岩淵他（1982）と同様に「他者志向性」と命名した。 $\alpha$ 係数は0.76であった。

これまでSM尺度の因子分析を行なった研究はいくつか見られるが、本研究もあわせてこれらの研究を概観すると、SM尺度には社交性や演技性などに代表される社会的なスキル、もしくは社会でうまくやって行けるための能力をあらわす要素と、他者志向性にあらわされるように状況や他者に合わせて自分の行動を変化させようとする要素が含まれていると思われる。前者には、Briggs, et al. (1980) や岩淵他 (1982) の「外向性」「演技性」因子、Gabrenya & Arkin (1980) の「社交性-対人不安」「スピーキング能力」因子、堀毛 (1986) の「エンターティナー」「演技力」因子などがあてはまり、後者には Briggs, et al. (1980) や岩淵他

Table 3 適切さへの関心尺度因子分析結果

	I	II	共通性
<b>第1因子 行動の適切さへの関心</b>			
私は他の人の服装を見ることによって流行に遅れないようにしている	0.65	0.05	0.42
私は他の人がどんな服装をしているのかに注意を払う方である	0.58	0.03	0.34
私は流行遅れの服装はできるだけしないようにしている	0.56	-0.03	0.31
私にとって重要なのは、自分の所属する集団に適応していることである	0.52	-0.07	0.27
私はパーティなどでは、しばしばみんなと調和するような行動を取ろうとしている	0.51	0.05	0.26
私はある場面での行動の仕方にほんのちょっとでも不確かさを感じたら、他の人の行動を手がかりにする	0.49	0.04	0.24
私は場違いなことをしないように自分のふるまいに対する他人の反応に気を配っている	0.45	0.13	0.22
私は自分のおかれた状況でどのようにふるまえばいいかわからないときには、別の人のふるまいを手がかりにする	0.45	0.09	0.21
私は一緒にいる人に少しでも自分に対する非難の色が見えたら、その人に対する行動の仕方を変えるだろう	0.42	0.19	0.21
私は、他のみんなが同じように行動の仕方をしていたら、その行動の仕方は正しいに違いないと感じる	0.38	0.10	0.15
<b>第2因子 状況による行動の変容性</b>			
私はしばしばつきあう相手や場面によって全く別人のようにふるまうことがある	0.02	0.82	0.67
私は場面が変われば、全く違う人のようにふるまうことがありうる	-0.03	0.76	0.58
私は相手によって自分の違う側面を見せる傾向がある	0.08	0.74	0.55
私は他の人が私に何を望んでいるかによって、しばしば自分のふるまいを変えることがある	0.37	0.44	0.33
私は時々他の人は本当を私を知らないのではないかという感じを持つことがある	0.08	0.41	0.18
私は自分を知っているのに、他の人は私を知らないと思う	0.09	0.40	0.17
私がどんなタイプの人間であるかは、人によって印象が違うと思う	-0.07	0.38	0.15
私は常に見かけのままの人間というわけではない	0.01	0.36	0.13
固有値	4.00	2.91	
寄与率	0.20	0.15	0.35
<b>削除項目</b>			
私は社会的な場面で、みんなと同じではなく、自分のその時の気持ちに従って行動を行う傾向がある	-0.30	0.18	0.12
私は他の人の言い方をまねて自分自身の表現であるかのように使うことがある	0.22	0.27	0.12

(1982)、Gabrenya & Arkin (1980)、堀毛 (1986) において見られる「他者志向性」因子や辻 (1988) が見出した「一貫性」因子などがあてはまる。ただし堀毛 (1986) が指摘するように SM 尺度は因子分析の結果の安定性が低いようであり、本研究でも 8 項目が因子負荷量が低いため削除されている。Snyder (1974) はセルフモニタリングの特徴として 5 つの要素

を設定して尺度を作成しており、それが因子分析の結果が安定しない原因の一つだと思われる。SM尺度は基本的には前述の2つの要素からなるが、それ以外のいくつかの要素も含まれている（悪く言えば尺度の信頼性が低い）と考えられる。

### 改訂 SM 尺度の因子分析

因子分析の結果、固有値1以上の因子が3つ抽出されたが、第3因子は固有値が1.1と低く、また因子負荷量の高い項目(0.5以上)は1項目だけだったため、因子数を2に指定して再度因子分析を行なった。その結果、第1因子、第2因子とも Lennox & Wolfe (1984)、石原・橋本(1992)と全く同様の項目で構成されており、石原・橋本(1992)と同様に第1因子を「他者の表出行動への感受性」と、第2因子を「自己呈示の修正能力」と命名した(Table 2)。α係数はそれぞれ0.77、0.67であった。

### 適切さへの関心尺度の因子分析

因子分析の結果、固有値1以上の因子が6つ抽出されたが、第3因子以降は固有値が急減し(第1因子=4.00、第2因子=2.91、第3因子=1.59、第4因子=1.49)、Lennox & Wolfe (1984)においてこの尺度が2つの下位尺度から構成されていることを考慮に入れ、2因子を指定して再度因子分析を行った(Table 3)。第1因子はすべて Lennox & Wolfe (1984)における「社会的比較情報への注意」の項目で構成されていたが、「私は他の人がどんな服装をしているのかに注意を払う方である」や「私にとって重要なのは自分の所属する集団に適応していることである」、「私は場違いなことをしないように自分のふるまいに対する他人の反応に気を配っている」など、周りの状況に気を配り、そこからはずれた行動をしないように気を配っていることを表わしており、ここでは「行動の適切さへの関心」と命名する。第2因子はすべて Lennox & Wolfe (1984)における「状況による行動の変容性」の項目から構成されており、ここでも同様に命名した。α係数はそれぞれ0.77、0.77であった。

### 尺度間の関係

抽出された因子について、項目得点を合計して尺度得点を算出した。自意識尺度、対人不安、自己評価についてもそれぞれ項目得点を合計し尺度得点を算出した。またSM尺度全項目についても合計してSM尺度全項目得点とした(Table 4)。

次にSM尺度の全項目及び下位尺度である演技能力、他者志向性について、改訂SM尺度、適切さへの関心尺度、自意識尺度、対人不安、自己評価との相関を算出した(Table 5)。その結果、全項目、演技能力、他者志向性とも、改訂SM尺度の自己呈示の修正能力とに中程度の相関があった。また演技能力は適切さへの関心尺度及び公的自意識と相関が見られない



Table 4 各尺度の平均値

	M	SD	得点範囲
<b>セルフモニタリング尺度</b>			
全項目 (25項目)	79.21	10.05	(25-125)
F 1 : 演技能力	22.86	6.33	(8-40)
F 2 : 他者志向性	29.98	6.38	(9-45)
<b>改訂セルフモニタリング尺度</b>			
F 1 : 他者の表出行動への感受性	19.78	4.83	(6-30)
F 2 : 自己呈示の修正能力	22.23	4.61	(7-35)
<b>適切さへの関心尺度</b>			
F 1 : 行動への適切さへの関心	33.06	6.93	(10-50)
F 2 : 状況による行動の変容性	28.84	6.01	(8-40)
公的自意識	40.57	9.01	(11-55)
私的自意識	37.85	7.97	(10-50)
対人不安	21.93	6.48	(7-35)
自己評価	33.18	7.31	(10-50)

のに対して、他者志向性は適切さへの関心尺度の2つの因子及び公的自意識との間に比較的高い相関があった。対人不安、自己評価に関しては、演技能力が対人不安と高い負の相関、自己評価と中程度の相関があったのに対して、他者志向性とは相関が見られなかった。

これらの相関の中で注目すべきは、他者志向性が自己呈示の修正能力と中程度の正の相関があり、対人不安、自己評価ともに相関が見られないことである。これまでSM尺度が論争的になってきたのは、効果的な社会的相互作用能力を測定しているはずのセルフモニタリング尺度が、不適応の指標と言うべき社会的不安と相関しているという現象(例えば、Briggs et al., 1980; Cheek & Briggs, 1981)のためであり、そのためにLennox & Wolfe (1984)がセルフモニタリング尺度中の社会的不安と関係する要素を適切さへの関心尺度として切り離し、セルフモニタリングの能力をあらわす改訂SM尺度を作成したのである。ところが本研究では、切り離すべき要素と考えられた他者志向性が、切り離した適切さへの関心尺度と正の相関をしているにも関わらず、セルフモニタリング能力をあらわす自己呈示の修正能力とも正の相関を示し、対人不安、自己評価とは相関が見られないのである。

この原因のひとつは、本研究の他者志向性が、例えば「本当は嫌いな相手でも表面的にはうまく付き合っていける」という項目に代表されるように、セルフモニタリングに含まれる能力の要素をあわせ持っていることが考えられる。またもう一つの原因として、他者志向性が高い者でも、対人不安に陥る者とそうでない者がいることが考えられる。他者志向性は公的自意識

Table 5 セルフモニタリング尺度と他の変数との相関

	全項目 (25項目)	F 1 : 演技能力	F 2 : 他者志向性
<b>改訂セルフモニタリング尺度</b>			
F 1 : 他者の表出行動への感受性	0.28**	0.24**	0.16*
F 2 : 自己呈示の修正能力	0.54**	0.49**	0.41**
<b>適切さへの関心尺度</b>			
F 1 : 行動への適切さへの関心	0.29**	-0.01	0.49**
F 2 : 状況による行動の変容性	0.33**	0.08	0.45**
公的自意識	0.34**	-0.07	0.55**
私的自意識	0.26**	0.15*	0.17**
対人不安	-0.35**	-0.63**	0.03
自己評価	0.20**	0.44**	-0.10

\*p < .05, \*\*p < .01

Table 6 セルフモニタリング尺度と他の変数との偏相関

	F 1 : 演技能力	F 2 : 他者志向性
<b>改訂セルフモニタリング尺度</b>		
F 1 : 他者の表出行動への感受性	0.20**	0.12
F 2 : 自己呈示の修正能力	0.44**	0.35**
<b>適切さへの関心尺度</b>		
F 1 : 行動への適切さへの関心	-0.14*	0.50**
F 2 : 状況による行動の変容性	-0.18**	0.48**
公的自意識	-0.23**	0.58**
私的自意識	0.12	0.14*
対人不安	0.65**	0.22**
自己評価	0.47**	-0.23**

\*p < .05, \*\*p < .01

と相関が高かったが、菅原 (1984) の自意識尺度の研究では、対人不安と関係が深い公的自意識の高い者でも、同時に自己顕示性が高い者は積極的な自己呈示を行なうことが示唆されており、他者志向性の高い者も公的自意識の高い者と同じように、対人不安に陥る者と積極的に自己呈示を行なえる者がいるのだと思われる。実際に他者志向性は演技能力との間に  $r = .22$  ( $P < .01$ ) の相関があり、他者志向性も演技能力も高い者はそれほどまれではないと思われる。

これらの原因についてより深く探るために、演技能力及び他者志向性と他の変数との関係について、お互いの影響を取り除いた偏相関係数を求めた (Table 6)。その結果他者志向性は自己呈示の修正能力との相関をわずかながら減少させ、対人不安と低い正の相関、自己評価と低い負の相関を見せた。この結果は、やはり本研究における他者志向性が演技能力の要素を含

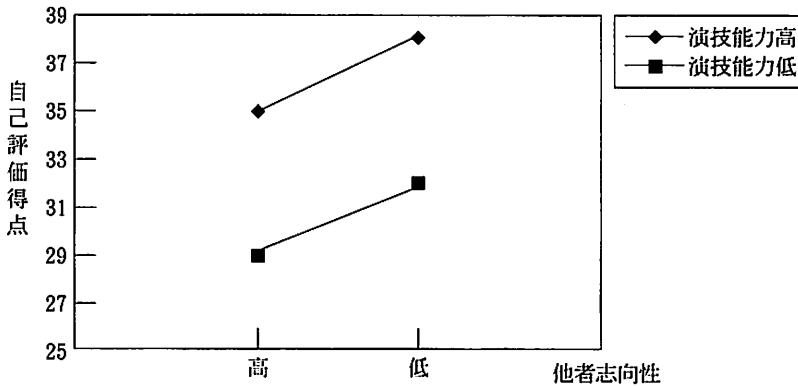


Fig 1 自己評価得点に対する演技能力と他者志向性の効果

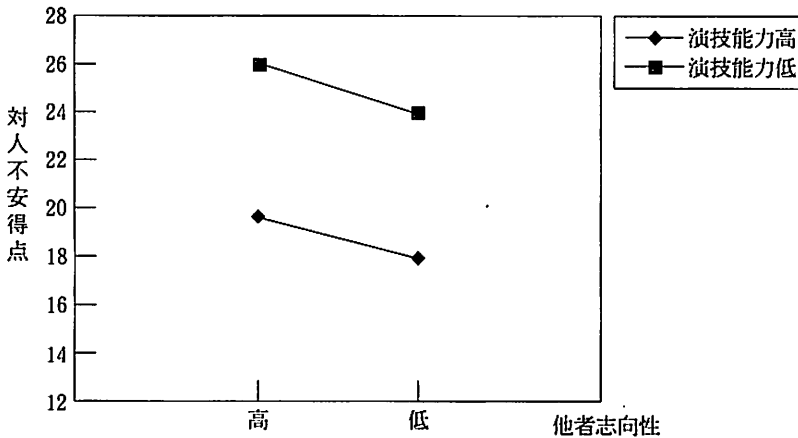


Fig 2 対人不安得点に対する演技能力と他者志向性の効果

んでいるために、対人不安、自己評価との関係が表れなかったことを示していると思われる。

興味深いのは、他者志向性の影響をのぞいた時に、演技能力と適切さへの関心尺度の間に負の相関があったことで、演技能力が高い場合にはむしろ自分の行動の適切さについては関心がなくなる、もしくは関心を持つ必要がなくなることを示していると思われる。

#### 演技能力と他者志向性の相互作用

演技能力と他者志向性の相互作用に関する仮説を検証するため、演技能力得点の高低、他者志向性得点の高低によって各々2群に分け、自己評価得点、対人不安得点について被験者間計画による2要因分散分析を行なった。群分けについては、演技能力得点、他者志向性得点とも上位25%を高群、下位25%を低群とした。その結果、自己評価得点については演技能力の主効果  $F(1, 201) = 33.67$  ( $p < .01$ ) 及び他者志向性の主効果  $F(1, 201) = 6.92$  ( $p < .01$ ) が

あったが、両者の交互作用は見られなかった ( $F(1, 201) = 0.04, n.s.$ )。対人不安得点についても、演技能力の主効果  $F(1, 201) = 61.54 (p < .01)$ 、他者志向性の主効果  $F(1, 201) = 4.76 (p < .05)$  があったが、両者の交互作用は見られなかった ( $F(1, 201) = 0.01, n.s.$ ) (Fig 1、Fig 2)。

この結果を見ると、演技能力の高い群は演技能力の低い群と比較して、他者志向性得点の高低にかかわらず、一貫して高い自己評価得点と低い対人不安得点を示している。また他者志向性の低い群は他者志向性の高い群に比べると自己評価得点が高く、対人不安得点が低いものの、演技能力との交互作用は全く見られなかった。

この結果は、自己評価、対人不安に対しては、Briggs & Cheek (1986) の指摘通り演技能力と他者志向性が逆方向の影響を与えていることを示しているとともに、演技能力の影響力が非常に強いことも明らかにしている。堀毛 (1986) は、セルフモニタリング行動は基本的には他者志向性によって左右されるが、演技能力の違いによってもかなり異なるだろうと述べているが、本研究の結果はかなり異なるどころか、「効果的な社会的相互作用を表わす (Lennox & Wolfe (1984)) セルフモニタリング行動の本質部分を演技能力が担っている可能性を示唆している。この結果は Lennox & Wolfe (1984) の指摘に合致しているが、これはセルフモニタリングという概念が本来パーソナリティ論争から始まったことを考えると重要な問題だと思われる。例えば、これまでセルフモニタリング得点と行動の一貫性や変動性の関係を調べた研究において、その関係が見出されないことがしばしばあった (例えば Brooking, Flood, Hessing, Kuhls, Miller, & Wright, 1982 ; Cheek, 1982)。もし演技能力の高低によってセルフモニタリング得点が左右されるとしたら、そのような結果も十分ありうることであろう。むしろ Table 6 の偏相関の結果は演技能力が高いと適切さへの関心が低くなることを示しており、演技能力の高さによってセルフモニタリング得点が高い者は行動の一貫性が高まる可能性さえあると思われる。これに対して、他者志向性の高さによって高いセルフモニタリング得点を示す者は、行動の変動性が高くなる可能性はあるだろうが、その者が演技能力を伴っていない場合には、効果的な社会的相互作用という意味でのセルフモニタリング行動とはならず、人の目を気にしすぎる不適応的な意味が付与されてしまうと思われる。この結果はセルフモニタリング尺度の問題点を明確にしているとともに、今後の研究の流れについてもその方向性を指し示していると思われる。これについては総合考察において言及する。

## 総合考察

### セルフモニタリング尺度は何を測っているのか？

本研究の結果、セルフモニタリング尺度は演技能力と他者志向性という自己評価や対人不安に逆方向の関係を示す2つの要素から構成されていることが明らかになった。ただ確かに演技能力と他者志向性はそれぞれを個々に見た場合には他のパーソナリティ変数とは逆方法の関係にあるものの、両者は実際には正の相関関係にあって演技能力の高い者が他者志向性も高くなっているため、セルフモニタリング尺度全体としては自己評価と正の関係、対人不安と負の関係を示したり、改訂セルフモニタリング尺度の2つの能力を表す尺度と正の関係にあるなど、得点が高くなればなるほど効果的な社会的相互作用を可能にしていると考えられる。

しかしながらこの尺度で Snyder (1974) の言う低セルフモニタリング傾向にある者の行動の一貫性を予測しようとする、それは少し難しいと言わざるを得ない。なぜならこの尺度において低い得点を示す者は行動の一貫性が高い者を意味するのではなく、効果的なセルフモニタリングができない者と考えられるからである。演技能力が適切さへの関心とは負の関係にあるという偏相関の結果からは、むしろ演技能力が十分なレベルにある者の方が周りを気にせず行動の一貫性が高いとも考えられる。

### セルフモニタリング研究の目的の混乱

これまで述べてきたような問題が生じるのは、セルフモニタリング研究の目的が当初 Snyder (1974) が考えていた目的から変化したためと考えられる。Snyder (1974) は当初、Mischel (1968) に代表される特性-状況論争に対する一つの回答としてセルフモニタリング傾向の個人差を問題とし、人によって特性を重視する者と状況を重視するものがあるということを示そうとしたのである。しかしながら、本研究で示されたとおり、Snyder (1974) のセルフモニタリング尺度は行動の一貫性を測定するというよりは、むしろ効果的な社会的相互作用能力を測定するものであった<sup>4</sup>。そのため、その後の研究が行動の一貫性を問題、目的とする研究（例えば Brooking, et al., 1982 ; Cheek, 1982）と、効果的な社会的相互作用能力を問題とし、セルフモニタリング尺度の信頼性、妥当性を検討する研究（例えば Briggs, Cheek, & Buss, 1980 ; 堀毛, 1986 ; Lennox & Wolfe, 1984 ; 辻, 1988）とに分離し、それらが渾然一体となってセルフモニタリング研究を混乱させてきたのではないかと思われる。

### セルフモニタリング研究の今後

今後のセルフモニタリング研究は、これまでのセルフモニタリング研究の混乱を繰り返さな

いたためにも、効果的な社会的相互作用としてのセルフモニタリング能力を問題とする研究と、特性-状況論争に端を発する行動の一貫性-変容性を問題とする研究とに明確に分ける必要があると思われる。前者においては、もはやセルフモニタリング尺度の信頼性、妥当性について云々するのではなく、効果的な社会的相互作用としてのセルフモニタリング能力を従属変数として、そのような能力を左右する要因やそのような能力を身につける方法などの研究を行なうことが生産的であると思われる。

後者においては、他者志向性と行動の一貫性-変容性との関係をもっと明確にする必要があると思われる。すなわち、他者志向性は行動の一貫性-変容性をどのくらい規定するのか、行動の変容性が高い者は他者志向性に伴う対人不安が高いのか、行動の一貫性-変容性を左右する他の要因は何か、などである。なお本研究は前者のセルフモニタリングの能力側面に焦点をあてたため、この行動の一貫性についてのデータが十分でないという問題点があった。今後、改訂セルフモニタリング尺度や適切さへの関心尺度も取り入れ、セルフモニタリング傾向と行動の一貫性との関係をより明確にしていく必要があると思われる。

#### 注

- 1 状況に応じた行動の使い分けの個人差が問題となってきた背景には、Mischel (1968) に端を発するパーソナリティ研究批判がある。人の行動を説明するのは状況か、特性かの論争 (person-situation controversy) を経て、特性も状況もといった相互作用論が優勢になり、さらにある人においては状況が彼の行動を説明し、別のある人においては彼の持つ特性がその行動を説明するというように、個人差を問題とするに至ったといえる。
- 2 構成要素は 1. 自己呈示の社会的適切さについての関心、2. 状況的に適切な自己表現の手掛かりとしての社会的批判情報への注意、3. 自己呈示や表出行動を統制し、修正する能力、4. 特定の状況におけるこの能力の利用、5. 表出行動や自己呈示が種々の社会的状況で一貫しているか変化するかの程度、の5つの内容からなる。
- 3 以下、改定 SM 尺度、適切さへの関心尺度においても、同じく因子負荷量 .35未満の項目を削除した。
- 4 これは Snyder (1974) が高いセルフモニタリング傾向が効果的な社会的相互作用を可能にするものだと考えていたからである。

文 献

- Briggs, S. Cheek, J., & Buss, A. H. 1980 An Analysis of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 679-686.
- Brooking, J. B., Flood, S., Hessinge, B., Kuhls, J., Miller, W. E., & Wright, T. 1982 Moderator variable analysis of the relationship between self-trait and peer-trait rating. *Psychological Reports*, **50**, 621-622.
- Cheek, J. M. 1982 Aggregation, moderator variables, and the validity of personality tests : A peer-rating study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 522-527.
- Cheek, J. M. & Briggs, S. R. 1981 Self-consciousness, self-monitoring, and aspects of identity. *Paper presented at the meeting of the American Psychological Association*, Los Angels, CA.
- Gabrenya, W. K., Jr., & Arkin, R. M. 1980 Self-monitoring scale : Factor structure and correlates. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **6**, 13-22.
- 堀毛一也 1986 自己モニタリングの概念および尺度に関する検討 東北福祉大学紀要、**11**、185-199。
- 石原俊一・水野邦夫 1992 改訂版セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究、**63**、47-50。
- 岩淵千明・田中園夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究、**53**、54-57。
- Lennox, R. & Wolfe, R. 1984 Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. NY: Wiley.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 サイエンス社
- Snyder, M. 1974 The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Snyder, M. 1987 *Public appearance and private realities*. NY: Freeman & Company.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究、**55**、184-188。
- 辻平治郎 1988 セルフ・モニタリング尺度の因子的構造と自己呈示理論の提案 甲南女子大学人間科学年報、**13**、51-65。
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究、**30**、64-72。

(平成9年10月15日受理)